

職人の技

シリーズ 33 〈熊手職人〉

五十嵐 茂尾 さん

商売繁盛のお守りとして、

経営者や自営業者にとつてはなくてはならないアイテム、熊手。しかし五十嵐さんは愉快そうに笑ってこう言う。

「熊手は、実は神様から授かったお守りではないんですよ」と。そう、熊手の世界はもともと人間臭くて、愉快なものなのだ。

「熊手を置くなら玄関。そこで外に向かつて飾るのがいいんです。なぜかといえは、熊手は自分の力で福をかき込むものだから。儲ける人つて実力以外の何かを神懸かり的に持っていますけど、その助けになるものなんです」

お守りは、神様の力を借りて自分の身を守るもの。熊手は、自分の思いを熊手に乗せて攻めるもの。なるほど、イメー

ジがはつきりする。

「積極的に、貪欲に、福をかき込む。だから遠慮なんてしないで、願ひ事はドーンと本音でいかないといけません(笑)」

「欲」というと下世話な響きがあるかもしれないが、「頑張ろう、目標に達しよう」というエネルギーは人間を前向きにし、願ひをかなえる力になる。熊手はその力を増幅してくれる武器なのだ。

「ベンチャー企業の方が大きな熊手を買われるのつて、いいことなんですよ。それだけ勢いを持つて頑張ろうとしているわけですから。つぶれちゃっ

熊手で世界を、 元気にする！

たら熊手は必要なくなつてしまふ。実際、カタカナの企業名さんからの発注が多い時つて、世の中元気ですよ」

時代の移り変わりが反映されやすいのも、熊手が人間と寄り添つてきたからこそ。福をかき込むためにいろいろな知恵と思ひが、1本の熊手に込められる。

「ベースとなる熊手、おかげ、しめ縄などの部分は変わらないんですが、そのほかにつくものが時代で変わります。その位置などを見ると、江戸時代から今までの商売の歴史も分かるんですよ」

例えば升は、江戸時代、米

や酒を正確に測るための道具から転じて商売繁盛のシンボルとなり、熊手に加えられた。鯛は「めでたい」からの語呂合わせで、これも古い時代のもの。1980年代以降に加えられたものには蕪がある。もちろん株を象徴したものだ。

デザインも最近では、立体的に前方に膨らみのある形が主流となつている。その奥に『福熊手屋 五十嵐』自慢のおかめがほほ笑む。

「おかめの表情も作り手それぞれで違います。うちはモダンな現代風(笑)。先代の母親、祖母が描いていた、このおかめのほほ笑みこそが、五十嵐の熊手」

20歳、先代である父が亡くなつた時に、決意してこの道を継いだ。子どものころから目に焼き付いた、おかめのほほ笑



文=岩瀬 大二
text: Daiji Iwase

写真=岡本 成生
photo: Masao Okamoto

みを守つていくこと。そしてそのほほ笑みで、世の中に「頑張ろう！」という思いを広げていくこと。それが五十嵐さんの自分に課した使命。

「熊手つていい文化だと思っんですよ。だからたくさんの人に持つてもらいたい。商売抜きでね。だから今、こんな名刺を持つて頑張っています」

差し出された名刺には、「浅草西の市 広報部長」の肩書が。

「スーツなんて似合わないし、着たくはないんですけどね(苦笑)。でもいろんな所に出掛け



て成果が出ているのはうれしい
ものです」

実際、浅草西の市も一時
は動員数が落ち込んでいた
が、最近では二の酉の時点で
100万人を突破するなど
活況。これも熊手業界挙げて、
自らかき込みといった成果とい

えるかもしれない。

熊手が売れていれば、世の

中が元気になる。おかめの笑
顔が心なしに愛らしく見える。

「唇の紅、実はハート型なん
ですよ。みなさんに『ラブ注
入!』ってことで(笑)。目標
は世界中に熊手を広げること。

すでに何カ国かでは実績あり

ますが、もつと広げて、世界

中を元気にできるといいです
ね」

ホームページや広報物作りで
は最新のコンピューター・ツール
も使いこなす。最近はツイッ
ターでも多くのフォロワーを獲

得。五十嵐さんのパワー、熊
手がどんどん増幅しているよ
うだ。



PROFILE

いがらし・しげお

1958年東京都出身。幼少から家業の
熊手、おかめ作りにかかわり、20歳で80年
続く「福熊手屋 五十嵐」の4代目を継
承。本業だけではなく、警神社福神講・
広報部長として、浅草西の市を広めるた
めの活動も行い、熊手の啓蒙、若い世代へ
の伝承などの取り組みにも積極的に参画し
ている。